

浄土

1991-6・7

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回（一日発行）
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授承認雑誌） 第三五号
平成三年六月二十五日印刷 平成三年七月一日発行
第五十七卷 六・七月号





七月の秀句

青比丘や鬼灯市に抽んでて

石田 波郷

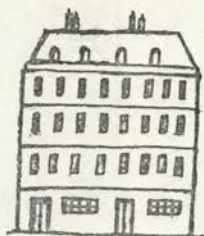
いづくにもとどろく潯や盆支度

石田 波郷

流燈に奪ひ去らるるものあり

石田 波郷

六・七月号



道綽は講説をやめて念仏を修し、
善導は雑修を嫌いて専修を勧め給
いき。 —『念仏大意』

目 次

— 法 話 —

- 一切唯心造……………坂 野 泰 巨……(2)
盂蘭盆を教えるやさしい心……………東 海 林 良 雲……(17)

— 法 話(中) —

- 鹿兒島で出会ったこと……………正 村 瑛 明……(10)

読者のページ

- 法然上人と式子内親王(上)……………河 住 玄……(24)

- (ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔5〕夏 書……………(30)

季語やぶにらみ (14)

囁 り ②

- ……………木 下 隆 一 ……(41)

◇◇心のしらべ・生活のうた①◇◇

- 受刑者の俳句……………細 田 隆 善……(32)

表紙絵 小林治郎画

法
話

一切唯心造

仏教詩人、東井義雄先生が七十九歳にてお
浄土へ帰っていかれました。

先生は百冊を超える本を出版されました。

坂^{さか}の^の野^の泰^{たい}巨^{きょ}

(大正大学講師)

先生の詩を、「はがき伝道」につかわせて
くださいとお願いしたら、「どうぞ、どうぞ」
と言ってくださり、出来あがったときとても



喜んでくださいました。

そのときの詩は、「やせて やせて！」というのです。

やせて

やせて

もう中にはなんにもないかのように

やせてしまっている

ねりはみがきのチューブ

最後の

最後の

最後の

最後まで

いのちをいただいている間は

はたらかせていただきましたよ……とけさも

もう とてもありそうにないチューブの

中から

ねりはみがきが

でてきてくれた

生きるということのほんとうの在り方と

終り方を

言い遺すように。

先生にお手紙を差しあげると、いつもすぐに返事をくださいました。たいへん時間を、そしていのちを大切にされていることがわか

ります。

先生は真宗本願寺派の住職で、小学校の校長もつとめられ、いろいろな活動が認められて、ペスタロッチ賞や正力松太郎賞など多くの賞を受賞されておられます。

私は六十二年九月、胃を三分の二ばかり切りとってもらう手術をうけた。胃潰瘍ということにはなっていたが、実際はどうかやらガンであったようで、しかもそれが初期の段階を相当過ぎていたらしいのである。……

と、先生の「最後の本」にそう書いています。

また、別の本には、

「ひび割れた古茶碗」のようなのちを生きさせていただいている私です。そして、ことが最後の年になるかもしれない。

とのべておられるのです。

先生は、「いつこわれても不思議でない体」であり、「終りの時は目の前」にあるけれども、現在ただ今、「いつ壊れてもみ手のまんなか」にいる私だと喜ばれています。

だから、私にこんな詩をくださいました。

雨の日も

風の日も

老いの身には

かけがえのない

大切な日ばかり

私たちのいのちは、今、ただ今が、かけがえのない大切な時なのです。しかし、それに気がついて生活している人がどれだけいるでしょうか。言いかえれば、いたずらにすごしている人がいかに多いかということでありましょう。

昔、中国の皇帝が、揚子江でしたか、ごらんになりながら船の多いのに驚き、ある禅師

にどれほどの数の船だろうかとたずねました。

すると、禅師は「二隻の船です」と答えました。皇帝はその意味するところをたずねますと、「それは名聞みょうもんの船と利養の船のみです」とのことでした。

名聞とは世間の名声、名譽のことであり、利養とは利益のことと、それらの追求に終始する生活のことを意味しているのです。つまり、五欲のなかの名譽欲と財欲のことです。

どなたの句か存じませんが、

みな人の 金かねや名譽にだまされて

まことの道に 入らぬおろかさ

というのを思い出します。

この二つの船は、あらゆる分野にわたって盛んであります。これらは年をとれば、減少するものかと思うとそうではありません。余談ですが、さいきんは老害といわれることがあって、お年寄りの名誉欲が旺盛だとのこととです。(それが、なぜ老害なのかは考えてみてください。)

ただ、考えておきたいことは、このような一生で終わってしまうとしたら、これほどみじめなことはありませんね。

禅には、「自己究明」「己事究明」ということばがありますが、要するに「真実の自己に目ざめる」ことが大切なのです。

東井先生の『老よ、ありがとう』のなかに、

「ゆずの木」という詩があります。先生は、ゆずの木が二十年たっても実がならないのを残念に思っていたところ、知人からいただいた本からゆずの木のことを教えられて、そのことを詩にしています。

「ゆずの実がなかなかならんのは

ゆずは大きくなるときに

わき見をしているからだ

自分のみかんだったかな

だいだいだったかなと

わき見しているからだ

わき見のあげく

ああ自分はゆずだったのかと

気がついたら

なるようになる」

という話

「長いこと生きても

わき見ばかりしていると

じじいになった

ばばあになった

というだけの

さみしいことになってしまう

長いこと生きさせてもらったおかげで

この身にしていただいた

ああわたしは わたしでよかった

といいきれるようになりたい」

とあった

先生は、そうしたゆずの木に目ざめさせられ、お念仏をよろこんで称えられる身にさせていただけたとのべています。

仏教には、ごぞんじの「生老病死」ということばがあります。生まれ老い、病み、死ぬ、これが人生最大の苦しみです。しかし、これが真人生に目ざめる機縁ともなるのです。

人生八十年時代の今日、死に対する恐怖をもっている人は少ないのかもしれませんが。それは、死をできるだけ自分から遠ざけているためでしょう。生老病までは認めることができて、死は自分のところにはまだまだやって

てこないと思い込んでいるのかもしれませんが。

ある学者が、さいきんの人は「生死のとなえ方に問題がある」とのべています。生死（しょうじ）ではなく、生死（せいし）としてとらえていることが問題なのです。

生死（せいし）をとらえるのは、生と死を分けてうけとっているのであり、生だけを楽しみ、死には目をつぶっていいこうとする生き方で、これは真実の生き方ではないと指摘しています。

仏教では、いのちを生死（しょうじ）としてうけとることなのです。

生は偶然だが、死は必然だといいます。

私たちがこの世に生まれたことは偶然かも

しれません。しかし、今、この世に生きてい
るということは、いつ死んでも不思議でない
自分が、今、ただ今を生かされているという
ことなのです。死は必然であり、生死まる
がかえの人生なのです。

現代人は、宗教を誤解しているようです。
宗教とは、予言をしたり、病気をなおしたり、
奇跡をおこしたりするものと思っている人が
います。法然上人は、

祈ることによって病いも治り、命ものび
るならば、だれ一人として病んだり死
んだりする人がいまいしょうか。み仏のみち
からは、お念仏を信ずる人を転重軽受と
てんじやうけうとく

いって、もともと重く受けるはずの病いを、軽く受けさせてくださるのです。

とのべておられることでもおわかりでしょう。

あなたは、「クオリティ・オブ・ライフ」

(Quality of life)というのをごぞんじでしょう。

人生の質、生活の質、生命の質というような意味ですが、患者の生活や人生の質的な面に重点をおいて医療をおこなおうものです。

ある医師は、「生きていてよかったね」という気持ちのことばだとも言っています。

東井先生は、私たちがどう生きたらよいかを本気で考えなさいと、お念仏のタネまきをしながら帰っていかれたのです。

『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮林雄彦 編

●B6版並製

●百四十二頁

●定価八百円(送料二〇〇円)

「教え・しきたり

行事の解説書」

◎本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

発行発売 群

〒170 東京都豊島区巣鴨4-7-6-403

書

電話東京(03)917-8411

振替口座 東京7-168759

発売 続群書類完成会

〒170 東京都豊島区北大塚1-14-6

電話東京(03)915-5627

書店でも注文できます。

法
話

(中)

鹿児島で出会ったこと



正^{まさ}村^{むら}瑛^{えい}明^{めい}

(東京・北区正受院住職)

今年の夏、ひょんなことから、鹿児島
県の屋久島を訪ねた。

ひとつは、屋久島山中の樹令七千二百
年ともいわれる「縄文杉」に会うため、

いまひとつは、山尾三省という人に会う
ために出かけた。

これら二つは、長い間の私の願いであ
ったが、ある方の縁で、昨夏、いとも簡

単に実現することになった。

その島には、もう一人、星川淳という人が住んでいることを知ったが、時間の都合がつかず、会えなかった。

羽田から鹿児島島を経て屋久島の空港に降り立つと、さすがに南国へやって来たという感がする。

さて、紹介された宿は、玄米菜食を中心とした自然食健康道場ということであった。

ところであったというのは、他人まかせで宿をお願いしたので、到着して初めて、かくなる道場であることが判ったからである。

その道場主のおばあちゃんというのが面白い人であったが、ともかく、むしろ

暑く、クーラーはもちろん扇風機もない部屋に通され、裸になっても全身から汗がふき出るといった状態におどろかされた。

部屋の前方は海であった。

海上には黒雲が低くたれこめ、時折、すさまじい雷鳴とともに雷が海に幾つも落ちるのが眺められた。

その光景は、太古の昔、人類出現以前、この地球上でくりひろげられたありさまを連想させた。

やがて、スコールが通りすぎ、雷鳴のどろきも遠去かっていった。

何とも形状しがたい空気に包まれ、不可思議な感動に全身が震えるのを覚えた。

屋久島へやってきた価値は、すでにこれだけで十分すぎる程であった。

弥陀身色如金山 相好光明照十方

弥陀の身色は金山の如し

相好の光明は十方を照らす

善導大師の日中礼讃の一句がどこからともなく聴えてきたような気がした。

翌日午前三時に宿を出発し、およそ十三時間かけて、九州一の高山宮之浦岳（一九三メートル）山中の「縄文杉」に会ってきた。

幹回り十六メートル、七千二百年を経たといわれる老杉は、ごつごつとしたこ

ぶをあらわに、やはり、神秘そのものであった。

その木肌に触れると意外に温かい。

無条件に頭が下がった。

人間は、時々、こうした神秘に触れて汚れた心を洗い流し、魂を透明にする必要があるのでないか。

アメリカの宇宙飛行士ラッセル・L・シュワイカートは、無重力の中を十日間旅した。

美しい地球の周りを回り、約二万七千三百キロメートル下の景観がたえず姿を変えてゆくのを見た。

この強烈な体験のおかげで、自分は地球との新たな関係に目覚めた、という。

それは地球の圧倒的な美しさである。明かるい鮮やかな色合いに満ちた地球と、無限に広がる漆黒の闇。

その鮮やかな対比を見ているうちに、突然悟った。生きとし生けるものはみなすべて、この地球という母なる星と切っても切れない関係にある。そして、避けることのできない繋りを思い、畏敬の念に満たされた。

〔地球・母なる星〕緒言より〕

生の依るところ、命の帰するところにシュワイカートは触れて頭を下げ切っている。

インドのタゴールのことばに、

仏を知れる人の宇宙に対する態度は深い敬愛の念である。ナモーナマス、我れ拜がみまつる。

とある。

イギリスの科学者、ジェームス・ラヴロックは、地球の生命圏は全体がひとつの生命システムをなしているという「ガイア仮説」の提唱者として、つとに有名である。

ガイアとは、ご承知の通り、ギリシア神話の女神の名前。大地の神格化で、ゲイともいうが、すべてのものを生む神で、カオスについて生まれ、天空神ウラ

ノスを生み、彼を夫として海（ポントス）、山々・ティタン族・キュクロペスらを、ポントスによりネーレウスらの海神を生んだ、といわれる。

つまり、生きて成長する地球生命圏そのものを、このギリシア神話の大地の女神の名前にちなんで「ガイア」と呼んだのである。

彼は、この「ガイア」を「地球の生命圏、大気圏、海洋、そして土壌を含んだひとつのフィードバックシステム」と定義している。

要するに、地球は、われわれ人類をも含んだ全体として、自己調節・維持機能をもつ大きな生命体をなしているのではないか、というのである。

「グローバルに考え、ローカルに行動する」というフリッツ・シュマツハーのことは愛するラヴロックは、西デヴォンシアのケアリー川に面した水車小屋で家族と共に田舎暮らしを満喫している。

夜になると星々や天の川を仰ぎ、日中は小鳥たちのさえずりを聞き、大地の匂いをかいで生活している。

このように、地球を見、感じ、地球を一つの生命体として実感している、という。

考えてみると、お釈迦さまも、善導大師、法然上人も、みな「グローバルに考え、ローカルに行動」した方々であったと思う。

近くには、山崎弁榮上人（一八五九—一九二〇）という念仏の大徳がいる。

上人は、二十一才の得度まで、宗教情操豊かな感性と深い洞察力をもって、農作業に専念していたのである。

つまり、大地を自分の肌で感じ、天地自然の営みを全身で受けとめていたのである。

上人の道詠に次のような歌がある。

天地のよろずの備え誰がためぞ

子らを育てんみむねならずや

天地はさまざまな設備をととのえて、親を通して私という子を産み、そして育てて下さっておる、と。さまざまな試練

を与えながらも立派に育てようとされておるのだ。そのことに気づきなさい、という。

この天地に満つる生命体の声なき声が聞えぬか、というのである。

同じく上人の道詠の一首。

人を世に出だすもついにとこよなる

みもとによばんためぞとは知る

大宇宙の営みの中から、生命体としての地球“ガイア”は産み出され、その“ガイア”はやがて高等な精神活動をするところの人間という生命体をこの世に産み出した。

それは何のためであろうか。

さまざまな人生航路を経ながら、ついに人間は永遠なる世界、平和な世界、魂のふる里を求めずにはおれぬようになって、最後の平安世界へと向ってゆくのである。

この方向に心が傾き、魂が落ち着いてゆく時、人は本当に安らい、何ものにも執われぬ自由が恵まれてくるのではないだろうか。

この方向に心が落ち着くと、不思議な心がわきおこってくる。

それはどういう心であろうか。まさに善導大師の礼讃のお言葉、

願共諸衆生 往生安楽国

願くは諸の衆生と共に

安楽国に往生せん

という利他の心、衆生と共にという心がわきおこってくるのである。

大自然の中に身を置くということは、身体的にも精神的にも、魂の面でも、大変有用である。

ともあれ、あこがれの「縄文杉」の対面、触れ合いを終えて、感激の中に無事宿へ帰ることができた。

翌日、山尾三省氏を訪ねて白川山へ向った。

(つづく)

法
話

孟蘭盆の教えるやさしい心



東^し海^{よう}林^じ 良^り雲^{よう}
雲^{うん}

(塩釜市雲上寺住職)

孟蘭盆を迎えるときのお寺もてんやわんやとなる。一年のうち最も多忙なのがこの行事といえるでしょう。

昨年急な用件があり、七月十五日に上京し街を歩くとさまざまな法衣姿のお坊さんに出会った。孟蘭盆の時期が月遅れ盆の八月という地方に住む私には、新暦の孟蘭盆を迎えて

いる東京のお寺の忙しさが実感できなかった。しかし法衣をひるがえし急ぎ足で通りすぎるお坊さんをみていると、月遅れ盆の八月が思いやられたことです。

私が上京したのは、東京在住で古くからの友人のお父さんが急死し葬儀を依頼されたため、盆中で多忙な菩提寺と遺族の希望する日取りがどうしてもかみ合わず、友人に浄土宗の坊さんがいることを知っている菩提寺の諒解をえての依頼となり、京都の友人と二人で汗だらけで何んとか葬儀をすませました。学生時代都内のお寺で棚経の手伝いをさせていただいていたが、この時期に上京したのは三十年振りなので、孟蘭盆の行事を外側からのぞいたような気がしました。

孟蘭盆の時期は、地方によってまちまちで新暦の七月盆は東京、横浜の大都市圏と東北に多く、旧暦のいわゆる旧盆は東北地方、関東地方の北部、中国、四国、九州、南西諸島の地方に多く、八月十五日の月遅れ盆は北海道と新潟、長野から関東南部を結ぶ線から西の関西地方に顕著であり全国的にもっとも多く広範囲に営まれています。正月と孟蘭盆の「民族の大移動」はこの月遅れ盆で、道路情報や新幹線の大混乱の様子が新聞、テレビを賑わすことになり、地方の道路どこも大都市圏のナンバーの車でいっぱいになってしまします。

どこのお寺でも、遠方に住んでおられる檀徒のお墓は普段寂しいものですが、孟蘭盆中

は、きれいな花でうずまり、香の薫りがたえません。

亡き親の背を流すごと墓洗う

魂棚の奥なつかしや母の顔

私の寺には、仏教青年会が組織されており青年会の諸君が一番張り切るのは盂蘭盆の墓参奉仕のようです。各地から来る墓参の方々に車の整理や、水桶に水を汲んで並べておいたりしてあげるのですが、特に好評なのは延命水と銘打った氷水のサービスで、寺の境内はいっぱいになってしまいます。暑い盛りに無料の氷水ですから子供達は特に大喜びで、境内のあちこちで賑やかにまるでご先祖様も一緒に楽しく味わっておられるように思われてなりません。第八回のボーイスカウト日本ジャンボリーの帰途ハワイのボーイスカウトとY・B・Aのメンバーが来寺した時、この氷水をご馳走して盂蘭盆の墓参奉仕の話をしたたら、引率してこられたハワイ別院の中村総監がそれはいいと早速別院にも製氷機を用意させてメンバーにサービスしているそうです。十年程この墓参奉仕を続けて定着し檀信徒の楽しみとなっているようです。しかしその陰には青年会諸君の奉仕があり、材料のすべてを提供してくれる篤志家があればこそで大変有り難いことだと感謝しています。

このようにどこのお寺でも、七月盆、旧盆、月遅れ盆と地方によって期日は違っても賑やかに盂蘭盆の行事を檀信徒と共に営んでいます。日本人にとって正月が一年のスタート

だとすると盂蘭盆は折り返し点といえるのではないでしようか。その間に春の彼岸、秋の彼岸というように一年のうち正月と盂蘭盆という大きな節と彼岸という小さな節があり、仏教的な行事で日本人の心をひきしめています。正月というと仏教とは関係ないようですが、柳田国男は正月も先祖祭であつたといっています。盆には盆棚がありますが、正月には通常の神棚とは別に恵方棚という年棚を設けたり、仙台地方では、正月十六日を先祖正月と称し賑やかに墓参りをします。盆と正月の習俗、行事は対応する点が極めて似ているのです。正月は祖霊を年神として盂蘭盆には生盆、生御霊としてそれぞれ別の形でとらえています。正月には一年のスタートにあたって、日頃お世話になっている人々に感謝をこめ年始まわりをしますが、それと同じように盂蘭盆には健在にいる親、仲人、師などを訪問し心のこもった贈り物をする盆礼があります。これはもともと盂蘭盆は盆正月といつても正月と同様に新しい区切りの出発点と考えられたことによるものです。

このように日本人の国民的行事といえる生活と切っても切れない盂蘭盆は、正月に営まれた先祖の魂祭りと共に長い歴史のなかで形が変化してしまいました。が、はっきりと先祖の魂祭りという形で残っています。盂蘭盆は、私達生者の世界に死者の霊を迎え、生者と死者が一時的にでも交歓するいろいろな風俗が織りなされながら営まれているといえるでしょう。先立つた亡きご先祖の霊を迎え一家一族の触れあい語らいの場であり、盂蘭盆の

ひととき仏の使いである香を聞き、自分を育んでくれた先祖に感謝し静かに人生とは何かを思いめぐらす大切な行事ではないでしょうか。

この日本人の生活に大きな影響を与えた盂蘭盆の行事がわが国で最初に営まれたのは、推古天皇十四年（六〇六）七月十五日齋会を設けたのが初めとされています。盂蘭盆とは梵語で *ulambana*（烏監婆拏）といい、はなはだしい苦しみを意味しており、漢訳すると倒懸、さかさずるしにされるような苦しみから救うのが盂蘭盆の供養なのです。盂蘭盆は釈尊の弟子で神通第一と称せられた目連という十大弟子の一人が、生母が餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを神通力で知りこれを救ったことに因んで始まったのですが、仏説盂蘭盆経には次の様にあります。目連が生母が餓鬼道に堕ちて瘦せ衰えているのを見て鉢に食物を盛って与えると、生母は左手で鉢を持ち右手で飯をつかもうとするが、口に入る前に火炭となって食べることができない、目連は生母の倒懸の苦をみて悲号啼泣して釈尊に訴えると「母の罪は重く、目連一人の力ではいかんすることもできない、それを救うには七月十五日の僧自恣の日（夏安居：夏の修業期間：の終わりに会集の僧が互いに懺悔を行って他の僧から訓戒を受ける行事）に七世の父母のために百味飯食五菜を供えて十方の衆僧を供養しその力にすがることがよい。また衆僧は施主のために七世の父母の成仏を祈り、然る後に食を受けよ」と言われたもので、その通りにすると生母は苦しみから救われ目連は仏に

向って、「若し未来の世に一切の仏弟子にして孝順を行ぜん者も、亦まさに此の孟蘭盆經を奉じて現在の父母乃至七世の父母を救度すべし」と発願し、釈尊は七月十五日をもって孟蘭盆を行う日と定められたという。孟蘭盆經はこの様にお經の内容が中国人の重んずる孝養の徳目が付加され中国化され、中国で孟蘭盆は仏教的行事から道教に取り入れられたりしていることから、孟蘭盆經は偽經だといわれるのですが、お經は釈尊の説法にもとずいてその精神を展開したものですから、むしろ積極的に釈尊のお説きになった教えをおし進めたものとして受けとっていかねばいけないでしょう。

目連の生母はあまりにも徹底した利己主義の人で自分の息子だけを可愛がったために餓鬼道に堕ちて倒懸の苦しみを受けていたというが、この世に平等に他人の子も我が子も愛情をもって区別なく接することが出来るでしょうか。大変むずかしいところです。私達はむやみにこの母を責められないような氣もします。世の父母は悪いと知りながら一途な愛がそうさせるのでしょうか。ある芸能人の息子のかえ玉受験が話題になりました。罪深き母親だからこそ母は尊いのです。釈尊が目連に教示するのはそのあたりではないでしょうか。この世に母なくして私達は生まれことは出来ません。

たわむれに母を背負いて

その余りに軽きに泣きて

三步あゆまず

石川啄木

親という字を分解すると我が子が遠くにいくと心配で心配で木の上に立って見るということになるそうで、父母の子供によせる愛情は筆舌にかえがたいものがあるのです。その七世の父母のために供養せよというのですから、総じては、この世に生きていた間の悪童によって地獄に堕ちているだろう先祖のために生き残った私達が世の人のため功德を施しそれによって先祖の人々が苦しみから解放されるように祈念してあげたいものです。今時代がこんなに下ってしまった後では、供養によって解放されたその喜びによってお礼のためにこの世に先祖がもどってくるなどとは思わないかもしれません。しかし想像力を働かせて下さい。その当時は未だ、神や悪魔や祖先の霊など様々な不思議さと一緒に人々は住んでいたものです。餓鬼道に堕ちた無縁仏の霊もあわせ弔うのですから、降霊のため盆棚に黄霊の国からお客様で大変賑うことになります。あの世からのもろもろの穢れをも含んでいますから、大変な恐れをもって年に一度危険を冒しても特定の人だけでなく先祖をもっている人は誰れでも祖霊を供養したのです。仏教徒のやさしい心があらわれているのではないのでしょうか。大変いい風習が残っているものです。古人に感謝しながら意味のある盂蘭盆を過ごしたいものです。

法然上人と式子内親王

(上)



河住

玄

一、序説

『法然上人行状絵図』(勅修御伝・四十八卷)

伝ともいう。以下御伝と記す)の巻一九に「聖如房」という尼僧につかわされた御文が載っている。御伝の註釈書『円光大師御伝翼賛』に「尼聖如イマダ考ヘズ」

とあって従来不明のままになっていた。

ところが昭和三十年ごろ、兵庫県明石市の無量光寺の小川龍彦師が、後白河法皇の第三皇女で賀茂神社の斎院になられ、歌人としても優れた式子内親王が、晩年出家して「承如法」と号せられたのに着目し「聖如房」は「承如法」の宛字で、同一人であると提唱して、その著『新定法然上人絵伝』（昭和三十年刊）に発表された。それを京都市の浄土宗総本山の門主岸信宏上人が賛成して、『仏教文化研究』第五巻に「聖如房に就いて」と題して発表した。

さらに『法然上人伝の成立史的研究』

第四巻に再発表せられたので、この説が権威づけられ、今では浄土宗門においてほとんど定説のようになっていいる。その一例として、『浄土宗大辞典』に、

聖如房 承如法の宛字であって、後白河法皇の第三皇女式子内親王のこと。

「正如房」また「しゃう如ぼう」とも書かれている。母は高倉成子、内親王は賀茂の斎院になり、大炊御門の斎院といった。橘兼仲らの妖言に係りして危く洛外追放になるところを辛うじてのがれた。のち病をえて、法然上人に往生の要義をたずねたので法然は懇切

な消息を送った。内親王はまた和歌にすぐれた才があった。——二二〇一（正治三年）

と記載されてある。さらに一九八九年、朝日新聞社から「面影びとは法然」と副題して石丸晶子著『式子内親王伝』が発行されて、一般にも知れわたったようである。

この耳寄りな、興味を惹く新説が、果して真実なのであろうか、どうか。自分は久しく半信半疑できたが、最近、御伝を調べる序であって、法然上人が聖如房につかわされた御文を精読したので、こ

の真偽について、いささか考えをまとめてみようと、不敏をかえりみず、あえて執筆した次第である。

一、法然上人の聖如房へつかわされた御文

まづ法然上人が聖如房の招請に対し、返事の御文を紹介する。本文は相当長いのでその要旨を八段に分けて示す。

第一段の要旨　聖如房の病気が重態となり最後に今一度拝面して、念仏往生の教へを蒙りたき申し出に対し、断り

の返信の書き出しの詞。

第二段の要旨 現在、別時念仏を決行中で他出かなはぬため、臨終の一念往生の弥陀の本願をよくよく御信仰あつて、浄土にての面会を期すべき旨を述べ。

第三段の要旨 いかにかに罪ふかき者も、念仏となふれば、仏の本願に乗じて、必ず往生極楽がかなふことを、観無量寿経の説によって勧めてをられる。

第四段の要旨 異解異行の人の念仏を妨げる言葉をきいて疑心をおこすことなくあくまで仏の本願、釈迦の教説、六方諸仏の証誠を信じて、決定往生の

信心を保持せられよと述べ。

第五段の要旨 臨終の正念は、仏の来迎によつてのこと（臨終の正念によつて御来迎したまふにはあらぬ）なれば、凡夫の説に迷はず、念仏を怠らずせられよと称讃浄土経の文によつて勧化してをられる。

第六段の要旨 自分（法然上人自身）の只今の別時念仏の功德を、貴方の往生のために回向しまゐらせますによつて今生の面謁を思はず一仏浄土にての会面を期待してひたすら念仏を勤めなさるやう勧化してをられる。

第七段の要旨 一向専修にならせて、

善根をのみ積み、久しくならせ給ふ御身なれば、御往生は疑ひなしと、善導和尚の説を引いて、再三勸化してをられる。

第八段の要旨 以上の事どもぜひ申し上げたくて、文面が長くなりました。もしひどく御衰弱の場合は、看護の人に、要点を約して、伝へてくださるやう頼んでをられる。

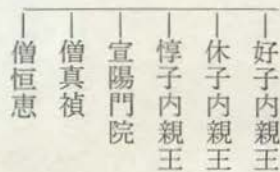
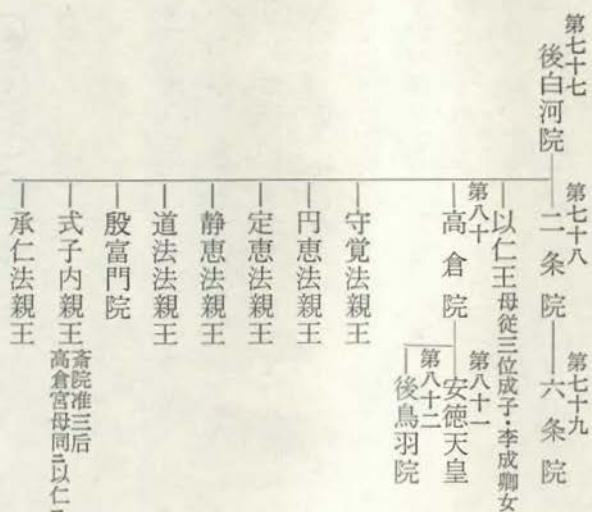
この御文には全体に尊敬語が非常に多く使用してあるので、聖如房は相当高貴な身分の尼僧であつたことがうかがわれる。

また第四段に「初めより仏の本願に信をおこさせ……御念仏の功つもりたる」と、第七段に「まづ心を発こし出家をとげさせおとしまして……一向専修の念仏に入りて久しくならせおはしまして」とあるので、出家して法然上人の門弟となり、念仏の信者となつて年久しいこともうかがわれる。

三、式子内親王の系図

ここで、式子内親王の系図を確認しておこう。

『本朝皇胤紹運録』（中御門宣胤撰）に、



とあり、また『賀茂斎院記』（伊勢貞春撰）には「式子内親王後白河院之皇女也、母從三位成子季成之女平治元年卜定号大炊御門斎院能倭歌法名承如法」とある。

（つづく）

①とくち俳話(5)

夏書

勝崎裕彦

「夏」と書いて「げ」と呉音で読めば、仏教読みで、安居あんどのことをいう。インドでは夏の三カ月間が雨期にあたり、かつては修行僧たちも遊行遍歴の生活を止め、一定の住処に滞在して安居の修行生活を勤めた。旧暦では、四月十六日から七月十五日のいちぢ一夏、げひやくにち夏百日の期間がそれである。

この夏安居、雨安居の期間、読経や坐禅、時に写経などに勤め励んで、心静かな修養をいたすのが、夏経げきょうとも夏書げあともいわれるものである。梅雨時のこの季節、読経を重ねて功

徳を積み、写経の成果は安居の終る解夏げげの時に納経して供養とする。

夏書僧筆の命もうかゞひぬ(駝王)

筆先に心を集中し、筆端にも精魂をこめる。一点一画もあだやおろそかにできない。写経の心得の基本である。これは住僧が、平時に書く塔婆や供養札などにおいても同様である。誠心誠意の態度が、書きものにおのずからなる気品と香気を添えることであらう。経を読む、あるいは誦する場合も同じことである。読誦の遅速、声の大小、高低にかかわらず、心をこめたまごころからのお勤めが大切であらう。

父の書をなぞらえみる夏書かな(裕彦)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

心のしらべ・生活のうた

(一)

受刑者の俳句

ここに紹介する俳句は、受刑者の中ですでに死刑の確定した人の吟じた句であります。この受刑者については数年来、俳句の作り方について指導・交流をつづけてきましたが、近年はすばらしい俳句が作れるようになりました。この作者は仏教信仰に生き、俳句に精進、処刑され

細田隆善（俳号豊明）

るまでのいくばくかの貴重な人生を句作に打ち込むことが何よりの生き甲斐として生きつづけています。以下、最近の俳句を紹介いたします。

立春の地の胎動^{たいどう}へ恵む雨



俳句は五七五の定形と季題が必要。立春は節分の翌日、今年は二月四日をさし、春立つともいい、二十四気節の一つですが、春めいたところをもちいます。まだ寒気は厳しいが、日脚が伸び草木が芽ぶき春めいてきます。この句は恵みの雨が降り大地に動きを感じることを、地の胎動と表現した点がすばらしい。独房の日々の生活であっても、季節の移り変わりはそこはかとなく感受されるものであります。このことを吟じた句です。

供^く華^げとせる白^{しろ}き沈^{しん}丁^{てい}開^{ひら}き初^{はじ}む

外部との接触が遮断されている独房の生活では、肉親の供養もできません。ま

た、罰を犯した人への懺悔の心はいかほど高かろうとも、供養のできるはずはありません。体操するときに取ることできた沈^{しん}丁^{てい}花^{はな}の一輪をコップに挿してみると、白い清らかな色と香りが匂います。それが作者にとってせめてもの供養であり、その心情をこの一句の中にこめた心情であります。

啓^{けい}蟄^{ちつ}や虫^{むし}揺^ゆり起^{おこ}す地^いの息^い吹^ふき

啓蟄は一年を二十四の気節に分かつその一つであって、毎年三月五日ごろに当たります。このころになると、土中に冬籠りや冬眠していた虫などが春めいてきたので地中から動き出すことによってこ

の季題ができました。この啓蟄を、大地が息吹いて虫を揺り動かしたと表現したところが主観的な佳句となりました。独房の作者は毎日同じような日々を繰り返してはいますが、大自然は冬から春へと季節の変化をしていくのに感銘して、この句が生まれました。

今生の別れと繁し花吹雪

王朝文芸以来、花は桜のこと、桜の花は一斉に咲き、一斉に散り、散るときを花吹雪という。独房の作者は体操のとき、外の空気を吸うことができ、桜の花をそのとき遠く近くに眺めることができましよう。しかし、華やかに咲き誇った花が、

花吹雪となって散ることは、作者にとつては悲しい眺めであります。まるでこの世の離別であるかの如く花は散っていきます。だが、花は散っても来春にはまた咲き盛ることができそうですが、作者は絞首台に上がることになれば二度とこの桜の花の姿を見ることはできません。年々歳々花相似たるも歳々年々人同じからず、の言葉通りです。桜の花びらに限りない作者の哀感がこめられた句であります。

這ひ出でて守宮^{やもり}の負へる闇深し

守宮は夏の季題、蜥蜴^{とかげ}に似ているが、人家に住むことが多いので屋守ともいいます。指の裏に吸盤があつて壁でも天井

でも張りつき夜間電灯に寄ってくる昆虫を捕食します。一匹の守宮が独房にいて消灯後の暗いとき闇の中の虫を待っている。この守宮は天井でも壁でも自由に這い歩き、外にも自由に出られるが作者は狭い独房の中に閉じこもっています。この二つを対象的にとらえ、負える闇深しがよく表現されている句です。人類五千年の文化の歴史が求めたものは自由といわれていますが、この一句の中にも自由の貴さがしみじみと感じられます。

教悔室誓く読誦や初夏の風

受刑者は教悔師によってその教えを受けることができます。この作者は教悔室

において仏の教えを受け、その信仰にめざめていました。そして過去の罪を心から懺悔し、経典を読誦しています。蒸し暑い教悔室に爽やかな初夏の風が涼しいことを称えた句であります。

枯葉一片繋ぎ留めたる蜘蛛の糸

蜘蛛は夏の季題、蜘蛛の巣に枯葉が一つひらひらとかかっている。枯葉は風に吹かれて巣にかかったのであるが、蜘蛛にとっては食べることでできない無用の長物であります。蜘蛛はこれを払うわけにもいかず、自然に落ちるまでそのままにしておくことを吟じた句であります。いつ払い落とされるかも知れないがまだ

巢に繋がれていることは生きている証しであり、余命いくばくもない自分の命ではあるが、現在生きていることの尊さを背景とした句であります。己れの命のある有り難さを蜘蛛の巣にかかっている一枚の枯葉に托した句でもあります。

寂として病舎はさま間に天の川

作者は右足を捻挫しアキレス腱の手術をしたため病舎に入院しました。そのとき病舎の間に天の川が見えた句です。天の川は銀河のこと、古今集以来、七夕とともに詠まれ、ロマンな夢が画かれてきました。天の川は初秋の季題、秋めくころになると天上にきらめくからです。無

数に輝く銀河の星は人と人との無数の交流を表現するが、作者の人々から遮断された孤独の生活である哀感が、この句の中に偲ぶことができます。

秋めきて雲に人恋ふ句ひあり

秋になってさまざまな雲の姿を眺めていると、人に逢いたい気持ちが一層高まってくる心情を吐露した句であります。孤独な独房の生活から流れゆく一片の秋の雲を眺めているときの句であります。一つの救いは、移りゆく自然の姿の中に一片の雲といえども俳句の素材として生かすことができることです。人という文字は人と人とのもたれあいからできた象

形文字からです。その意味をこの句から
偲ぶことができます。

亡き母を偲ぶ鉄窓十三夜

作者の母は既に亡くなっており、何か
と母を思い浮かべることでしょう。独房
は狭いが鉄格子のはめられた窓があり、
この窓から自然の風景の一部を眺めるこ
とができます。十三夜は後の月ともいい、
陰曆九月十三日の月ですが、八月十五日
の名月よりも天候が落ちつき美しさがよ
く眺められるので、十三夜の月が賞賛さ
れてきました。鉄窓の中の作者は十三夜
の月を眺め、亡き母を偲びますが、母に
供養することもできず、思いだけをこの

一句に吟じたものであります。

縋りいて草に枯れゆく秋の蝶

秋の蝶は老蝶ともいい、深みゆく秋に
衰えてゆき死滅する淋しい姿を持ってい
ます。草にすがりつきながら孤独な秋蝶
が枯れ死んでいくであろうことを吟じた
句です。この孤独な秋蝶こそ作者自身で
あることを偲ばせる一句であります。

鰯雲賜はりし本に獄書の印

秋になると雲の白片が白い斑らのよう
に空に浮かび、鰯が群れているようであ
ることから鰯雲という秋の季節ができま

した。卷積雲けんせきうんといいますが、鯖の背のようでありますので、鯖雲、または鱗雲ともいいます。寄贈受けた本に管理所の獄印が押してあったという異色の材料を促えて句に吟じたものです。窓外には鯖雲が大空を被っており、作者は一冊の本を大切に読もうとするが、赤い獄書の印が哀感をそそったという一句であります。

獄死者を送る裏門冬の日

獄中であって病死したのか、処刑されたのか定かではないが、一人の死者が獄舎の裏門から送られていく。空には寒い冬の月がそれを見送るかのように照っているのみで、だれも見送るものはいない

淋しい情景を垣間見たときの句であります。罪さえ犯さなければ世にあって人々に送られることである死出の旅路を哀れんだ句であるが、同時に作者自身もいつの日かこのように獄舎の裏門から淋しく送り出されるであろうことに思いをよせた句であります。

高き塀零れて二羽の寒雀

雀はいつでもどこにでもいるので季節になりませんが、寒の頃になると食べ物がないので人家に近づき、毛並みもふくらむことから、寒雀、ふくら雀という冬の季節ができました。獄舎の高いコンクリートの塀は灰色で殺風景、ただ高いだ

けであります。この高い塀を零れるように二羽の寒雀が飛んできた寸景を吟じた句であります。高き塀より零れると表現したのが技巧的に佳、また寒雀が番い二羽であろるか、手に手をとるように飛んできたことを写實的に表現して佳句となりました。手などとりあうことのできな

い孤独な作者にとっては二羽の寒雀はうらやましく見えたのでしょう。雀は小さいが高々と聳える塀を越えられるが、作者はこの塀を毎日眺めてはいるが越えることはできない、この二つのことを対比した真に心打たれる俳句となりました。

☆ お詫び と お 願 い ☆

このたび印刷関係のまことにやむをえない事情から、『浄土』六・七月号合併号として刊行いたしました。諸般のきびしい状況から、しばらく発行不定期の状態がおこりうるかもしれません。心よりお詫び申し上げます。暖かいお見守りをお願い申し上げます。

法 然 上 人 鑽 仰 会

◎「浄土」表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六・七月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

季語やぶにらみ

(十四)

囀り (2)

木の
下
隆

(随筆家)

私が囀りという言葉を知ったのは、五歳か六歳の頃だったと思う。サーカスの客寄せに演奏されていたメロディを覚えて帰って口ずさむと、母は「それは『天然の美』という歌で、女学生の唱歌よ」と言っ

へ空にさえずる鳥の声
峯より落つる滝の音
大波小波とうとうと
響き絶えぬ海の音
と歌ってくれた。子供心にも囀るは鳥の啼

き声と理解できたが、とうとうというのを、なぜか私はどう、どうと覚えてしまつて、後年放送会社に就職して音楽番組に携わるようになるまで、間違ひとも思わずにそう歌つていた。ところが或る時、岩波文庫の「日本唱歌集」で調べてみると、正式の題名は「美しき天然」で、歌詞はその後に、「聞けや人々面白き／この天然の音楽を。／調べ自在に弾き給ふ／神の御手の尊しや。」と続いて、一番を形成していた。但し、同じメロディの繰り返しかから、私のように海の音までが一番と思つてゐる人は多いはずである。また、大波小波の次はどうどうではなくたうたふで、それには鞆鞆という難しい字が当てられており、漢和辞典で確かめると、大きい音の形容、鐘鼓・怒濤・瀑布などという——と出ていた。

往々にして耳で覚えた言葉、特に歌ではこの過ちを犯しがちである。以来、鞆鞆は私には忘れ難い文字となった。

囀りという言葉が意識して、使つたのは、高校三年になつた年の春であつた。句会の席題に出されて、苦心慘澹の末、「囀りや山越えて行く隣り村」というのを投句したが、全くの想像句であつたにも拘らず、意外に点数を稼いでしまつた。もしかしたら、拙句を採つてくれた年長の句友にはそんな体験があつたのかもしれないが、へ実は熊本民謡「おもやん」の、「一つ山越え、も一つ山越え、あの山越えて……というのがヒントで」とも言えず、内心忸怩たるものがあつたのを思ひ出す。

それから更に一年近く経って、あと数日で卒業という日の国語の時間に、教師は教室に入ってくるなり、黙って黒板に孟浩然の詩「春曉」を書きつけた。そして、

「誰か、これ書き下せるやつはいるか」

と、じっと視線を私の顔に当てた。暗にお前やれと言っているんだな、と私は思った。

「字が下手でもいいですか」

と聞くと、

「かまわん。読めればいい」

と教師は言った。

春眠曉を覚へず

処々啼鳥を聞く

夜来風雨の声

花落つること知る多少

と書き終えて席に戻り、黒板の文字を眺め

ると、我ながら嫌になるほど稚拙だった。

「なるほど、自慢するだけあって下手な字だな。書き下しの方はまあいいか」

教師も呆れ顔だった。と、その時、突っ張りの一人が立ち上がって抗議した。

「先生、おかしいじゃないですか。さっき、先生は下手でもかまわんと言ったでしょ」

卒業間際の消化授業ということもあって、教室の中はだらけ切っていた。生徒の方も事あらば一荒れしようと待ち構えていたのだから、忽ち蜂の巣を突つ突いたような騒ぎになった。まさか私の下手な字から、こんなことになるうとは思ひもしなかったので私は慌てた。何とか收拾しなければ、と、咄嗟に、

「先生、左でならもう少しまともな字が書けると思います」

と言った。ペンと箸は右手を使っていたが、私は元来左利きなのである。

「そうか。じゃあ書いてみる」

教師は顎をしやくって、私を促した。

結句の読みに「花の落つるを知る多少ぞ」と少し変化をつけて書き終えると、教師は前のと見比べて、

「うん。こういう読み方もあるな。それに、左で書いた方が字が生きている。人は見かけによらぬものというが、これはお前の隠れた才能だな」

と言った。それに対して、

「なあに、トウキチはギッチョだもん。当たり前だよなあ」

と、混ぜっ返すのがいたりして、教室の空気は一気に和んだ。

「まあ聞け。人は誰でも隠れた才能を持っているもんなんだ。自分では気づかないかもしれないが、でも他人の目から見れば、それが大変なことだったりする。つまり他人に評価されて、初めてその人間の才能は花開くというもんだ。そのためには、何事にも地道な努力を怠ってはならない。この詩を書いた孟浩然という人は、役人になりたくて進士の試験つまり高級官吏登用試験を何度も受けたが駄目で、結局役人にはなれなかった。しかし、詩の世界では早くからその才能を認められていたから、王維、張九齡といった文人政治家を友に持つこともできた。時あたかも玄宗皇帝の治世、唐の文化、いや中国の文化が最も栄えた時代だ。李白や杜甫とも親交があったかもしれない。孟浩然のように地方に隠遁してい

でも、都の人の心を動かす詩は書ける。そこ
んとところが大事なことなんだぞ。お前等も卒
業後は進学する者、就職する者、家業を継ぐ
者と道はいろいろに分かれるが、どの道に進
んでも、他人に認められ、尊敬され、頼りに
される人物になつてもらいたい。これがお前
達に贈る私の言葉だ」

「孟浩然はその後どうなつたんですか？」

「友達が訪ねてきたの喜んで、酒を飲み過
ぎて死んでしまったということだ。五十そこ
そこだったそうだから、脳卒中かなんかだつ
たんだらうな」

「先生もそろそろ孟浩然が死んだ年に近づい
ているんですから、酒にはくれぐれも気をつ
けて下さい。これが我々の感謝の言葉です」
先程の突っ張りがいやにしんみりした声で

言うと、酒好きの教師はニヤリと笑つて、

「その言葉、有難く頂いておこう。さて、前
置きが長くなったが、この詩について何でも
かまわん、感想を書いて、書いてらここに置
いて随時帰つてよろしい」

教卓を掌で軽く叩くと、

「じゃあ、お互いに頑張らうな」

と、後ろも見ずに教室を出て行つた。今に
して思えば、その時間は私が高校時代に受け
た一番感動的な授業であつた。

春の夜明けは眠たいな

鳥の囀りうるさいぞ！

よべは吹降りだったから
花もおおかた散つただろ

意識めいた戯れ歌を書いて、私は真っ先に
教室を出た。志を果たせず、快々と楽しまぬ

日々を送った孟浩然の心情は、浪人を覚悟していたとはいえ、懶い春を予感する私の思いとも相通するものがあつた。小鳥の朗らかな囀りも孟浩然には無縁で、むしろ煩わしい騒音でしかなかったのではないかと思うと、こんな戯れ歌になつてしまつたのである。

ホトトギスは「テッペンカケタカ」「特許許可局」と啼くそうだが、私はこの年になるまで、その声を聞いたことがない。

過日、東京の家に來た伊豆大島の知人が、遠くで啼いているカッコウを聞きとがめて、「武蔵野もこの辺にはまだカッコウが渡ってくるんですね。大島にはホトトギスはいるが不思議なことではある。

カッコウはいません」

と言つた。ホトトギスを知らないと言つて、「もうこの時期、朝から晩までうるさくて。

實際は古歌に詠われているような風流な鳥ではありません。あれも一種の囀りでしょうが、縄張りを主張しているのではなく、雌を誘うおべんちゃらの恋が成就しても巢を作るでなく、卵は他の鳥の巢に産みつ放し、雛はその鳥に育てさせる——そんなやつに、縄張り根性があるはずないじゃないですか」

「能天気なところは現代の若者風ですか？」

「いや、現代の若者がホトトギスに似てきたんでしょう」

と笑つた。その言葉に頷きながら、私はなぜ同じような習性を持つカッコウが大島へ行かないのだらうと思つた。

美しく生れ拙く唄るよ

富安風生

私の好きな句の一つであるが、この句を見るたびに、この鳥がいかなる鳥であるかという事よりも、放送会社に勤めている間に、私の前を通り過ぎて行った数千人の新人歌手、中でもアイドル歌手といわれた連中について考えてしまうのである。

アイドル歌手の資格は一にも二にもカワイコちゃんであることで、歌は二の次、極端なことをいえば、音痴でも一向に差し支えなかった。デモテープを聞かされて、

「こんなのデビューさせるの？」

と聞くと、

「歌はこれから仕込みますよ」

というのが、関係者の一致した答えだった。多い時には毎月何百人もの新人がデビューし

ていたが、殆んどはこの手の歌手で、生で歌わせると拙く唄ることさえできないのもいた。たった一枚レコードを吹き込んだだけで、日の目を見ずに消えて行ったあの連中は、いまだどこでどうしているのだろうか。

そんなことを思っている間も、伊豆の家を巡る雑木林の中では、実に多くの種類の鳥達が唄っている。姿は新緑に隠れて見えないから、その美醜は定かでないが、声はそれぞれに個性があつて美しい。もしこの稿を書くことがなかったら、そんな声にも気づかずに、今年も過ぎて行ったかもしれない。

風薫る五月——鳥達の恋の季節の真っ只中に、いま私は坐っているのである。

(この項おわり)

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊誌『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にも遺漏が多く、また校正のミスも相変らずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後もしづつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上のお願ひもできにくいことはありませんが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げます。なにを隠しましょう、一ページ、ポツカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ）
（風におまとめ下さい）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 六・七月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年六月二十五日

印刷

平成三年七月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話〇三（三二六）五九四四

〒103（振替）東京八一八二一八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

暮らしに
生かすに

仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価二二〇〇円

◎ 仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常雑語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

△出版・発行▽

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話(〇三)三三三三―三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六―三三五一まで。